

ヤコブ ④ 兄エサウとの再会

□ヤコブの信仰の手本

1. 祖父アブラハム、父イサクと同様、寄留者の立場を甘んじて受けて、忍耐し続けた。
ヤコブは、ノアやヨブと同じように、「全き人」と評された。
 - 人間の「全き者」とは、全く罪を犯さない人という意味ではない。その人の心が神の方をきちんと向いているかどうか、である。
2. 長子の権利を軽蔑した兄エサウとは対照的に、ヤコブは、アブラハム契約の約束を受け継ぐという霊的富の価値を認め、それを真剣に求めた。
3. 父イサクが兄エサウの方を愛し、エサウに長子としての祝福を与えようとしたとき、母リベカは夫イサクをだましてでも、弟ヤコブに祝福を受けさせようとした。ヤコブは母の計画に乗って実行してしまった。イサクはこの事件を受けて、神のみこころに逆らっていた自分の罪に気づき、自ら進んで、あらためて、ヤコブを祝福し、嫁をリベカの実家から迎えるよう命じて、ヤコブを送り出した。ヤコブはこのあと、生涯をかけて、父をだました罪の刈り取りをすることになり（箴言 22：8、ガラ 6：7）、わざわざに耐え続けた。
 - (1) 母リベカの実家の当主ラバンから、だまされた。
 - ① ラバンの2人の娘のうち、妹のラケルを嫁に求め、そのために7年間、ラバンのもとで働いた。ラバンはヤコブをだまして姉のレアを与え、妹のラケルをも妻にしたいなら、さらに7年間の勤労を要求した。
 - ② 14年の勤労期間が明けると、報酬を伴う契約に移行した。しかし、ラバンはヤコブの取り分がなくなるように条件を変えた。この期間は6年。
 - (2) ヤコブは、12人の息子を得たが、息子たちから、だまされた。
 - ① 次男シメオンと三男レビによるシェケム報復事件（創世記 34章）
 - ② 長子ルベンの不祥事（創 35：22）
 - ③ 11番目の最愛の息子ヨセフ 17歳を他の兄弟たちが妬み、奴隷に売り飛ばした事件。ヤコブには、「ヨセフは野獣に殺されたい」と報告され、ヤコブはヨセフが死んだものと思い込んだ。ヤコブ 107歳。
4. ヨセフはエジプトの高官の家で奴隷として働いたが、後にエジプトの王に次ぐ地位に就いた。ヤコブと彼の家族は、飢饉に見舞われ、ヨセフを頼ってエジプトに避難した。エジプトに到着したとき、ヤコブは130歳、次のようにエジプトの王ファラオに語った。「私がたどってきた年月は130年です。私が生きてきた年月はわずかで、**いろいろなわざわいがあり**、私の先祖がたどった日々、生きた年月には及びません。」その後、ヤコブはエジプトで17年間過ごし、147歳で死んだ。「信仰によって、ヤコブは死ぬとき、ヨセフの子どもたちをひとりひとり祝福し、また自分の杖のかしらに寄りかかって礼拝した」（ヘブル 11：21）

□本日の内容：ハランに来て、妻を得るための勤労期間14年、報酬を伴う契約期間6年、合わせて20年が経過した。ヤコブは、**おじラバンからだまされたが、神はラバンがヤコブに害を加えることを許されなかった**。ヤコブは神のお告げを受けて、ハランを去り、父イサクのいるところ、カナンの地に帰って、**兄エサウと再会**する。本日は、シェケムの町で起こした報復事件の前までの経緯を見ます。

1. ハランを去る（創世記31章）

- (1) 1～21節 「あなたが生まれた、あなたの父たちの国に帰りなさい。わたしは、あなたとともにいる。」 ハランに来てから20年、ヤコブは97歳。
- (2) 22～42節 ラバンが追跡し、ヤコブの一行に追いつく
- (3) 43～55節 ガルエデ「証しの塚」、別名ミツパ「見張り」、での和解契約

2. 兄エサウとの再会の前に（創世記32章）

- (1) 1～2節 天使たちの集団が現れたので、その場所をマハナイムと呼んだ。

さて、ヤコブが旅を続けていると、神の使いたちが彼に現れた。ヤコブは彼らを見たとき、「ここは神の陣営だ」と言って、その場所の名をマハナイムと呼んだ。

- ① 神の「陣営」： マハネ「宿営、キャンプ」
- ② マハナイム=マハネの双数、「ふたつの宿営」。一つは1節の天使たちの集団を指す「神の宿営」、もう一つはヤコブの宿営。
- ③ ヤコブがハランに向かったときにはベテル「神の家」で、そして帰って来るとマハナイム「ふたつの宿営」で天使たちが現われた。これは、**ヤコブが神の守りの中にある**ことを示している。



- (2) 3～21節 セイルの地、エドムの野にいる兄エサウへ使者を送る。エサウへの贈り物を準備する。セイルの地は、父イサクがいるカナンの地の外（そと）。
 - ① 使者からエサウが「400人を引き連れて来る」との報告を受けて、攻撃を受けるかもしれないという恐れを抱く。宿営を二つに分け、神に祈る。
 - ② 14～20節 a 贈り物を準備する。5つの群れ・・・やぎ220頭、羊220頭、らくだ30頭とその子らくだ、牛50頭、ろば30頭
 - ③ 20b～21節、ヘブル原文では、「顔」が5回登場する。後述「神の顔」
 - 贈り物で彼（の顔）をなだめ
 - それは私（の顔）より先に行く
 - その後で、彼と顔を合わせよう
 - もしかすると、彼は私（の顔）を受け入れてくれるかも
 - 21節 こうして贈り物はヤコブ（の顔）より先に渡って行った

- (3) 22～32 節 ヤボク川を渡る場所で、ヤコブは一人だけ後に残った。夜明けまである人と格闘した。ヤコブは、その場所の名を、ペヌエル「神の顔」と呼んだ。
- ① 22 節 ヤボク：ヤコブ、ヤベイク「格闘する」との音合わせになっている
- ② 24 節 ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。
「ある人」 主の使い=第二位格の神（ホセア 12：4）
- ③ 26 節 もものつがいを外されても、ヤコブはその人にしがみついていた。
「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」
- ④ 28 節 あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。
イスラエル=サラ+エル 神と戦う
- 【神が戦う】という意味にも受け取れる。その場合は、改名したことで、これからは神がイスラエルのために戦ってくださる、という意味になる。
- ⑤ 28 節 あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。
ヤコブは祝福を得るために神と格闘した、また、ヤコブはこれまで、人（複数形）とも格闘してきた。エサウやラバンのことである。ヤコブは、神にも人にも勝った。
- ⑥ 30 節 「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた」
「神を見た」・・・ヤコブは「ある人」を神ご自身であったと認めた
- ⑦ 30 節 ヤコブはその場所をペヌエルと呼んだ。・・・ペニエル「神の顔」
- ⑧ 31 節 彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽は彼の上に昇ったが、彼はそのもものために足をひきずっていた。

3. 兄エサウとの再会（創世記 33 章）：エサウはヤコブを殺さず、その日、セイルへ帰って行った。
- (1) 1 節 ヤコブが目を上げて見ると、見よ、エサウがやって来た。四百人の者が一緒であった。
- (2) 2～3 節 ヤコブは自ら彼ら（妻や子どもたち）の先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。
- (3) 4 節 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。
- (4) 5～16 節 エサウはヤコブから贈り物を受け取り、その日、セイルへ帰って行った。
- (5) 17～20 節 スコテ「小屋」を経て、シェケムの町の手前で宿営した。

ヤコブは神の祝福を受けるために神にしがみつきましたが、新約時代の信者である私たちも、そのようにする必要があるのでしょくか？ 関連箇所 エペソ 1：3